

平成25年度

幼・保・小ジョイントプロジェクト
岩舟町の取組



栃木県総合教育センター幼児教育部

栃木県幼児教育センター

I 幼・保・小ジョイントプロジェクトとは

幼・保・小ジョイントプロジェクトとは、幼稚園・保育所・小学校の教職員が合同で研修し、幼児期の教育の成果を小学校教育に生かせるよう、市町における連携の推進を支援していく事業である。幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続が図れるよう、幼稚園・保育所・小学校の教職員の相互理解、連続した指導計画の作成や連絡体制の整備に組織的に取り組むなど、県と市町教育委員会が一体となり、地域の実情に応じた連携を推進している。

平成25年度は、岩舟町で5回実施した。岩舟町では、これまで、幼稚園や保育所の幼児が、就学前に小学校の見学に行くなどの交流を行ってきている。

今年度は、岩舟町教育委員会が中心となり、岩舟町の幼稚園・保育所・小学校の教職員が一堂に会し、幼稚園、小学校の保育、授業を参観し、研究協議をもった。さらに、幼稚園と小学校の交流活動も参観し、研究協議をしながら互恵性のある交流活動の内容、方法が明らかになってきた。5回目には、幼稚園・保育所・小学校の教職員同士がすっかり顔見知りになり、本音で協議ができるような関係性が構築された。

次ページからは岩舟町の実践を紹介する。岩舟町では、子どもの発達や学びの連続性がより明確になるように、事業5回の共通テーマ「協同的な学び」を設けた。



Ⅱ 平成25年度 幼・保・小ジョイントプロジェクトの実際

1 概要

回	日・会場	内 容
第1回	5／14（火） コスモスホール	〈 趣旨説明 〉 1 挨拶 岩舟町教育委員会教育長 和久井 紀明 栃木県総合教育センター幼児教育部長 田渕 光与 2 趣旨説明 栃木県総合教育センター幼児教育部指導主事 前原 由紀 3 講話「幼・保・小ジョイントプロジェクトに向けて」 宇都宮大学教育学部教授 青柳 宏
第2回	10／16（水） 岩舟小学校	〈 小学校の授業公開 〉 1 第1学年算数科「くらべかた」 2 研究協議 (1) 挨拶 岩舟町立岩舟小学校長 川島 宗竹 (2) 本日の授業について 岩舟町立岩舟小学校教諭 大栗 奈穂 (3) グループ協議「1年生が協同的に学ぶために大切にしたいこと」 (4) 発表 (5) 指導助言 宇都宮大学教育学部教授 青柳 宏
第3回	11／29（金） 岩舟幼稚園	〈 幼稚園の保育公開 〉 1 5歳児「みんなでおうちをつくろう」 2 研究協議 (1) 挨拶 岩舟幼稚園長 堀 昌道 (2) 本日の授業について 岩舟幼稚園教諭 島田 麻理恵 (3) グループ協議「5歳児が協同的に学ぶために大切にしたいこと」 (4) 発表 (5) 指導助言 宇都宮大学教育学部教授 青柳 宏
第4回	12／11（水） 岩舟小学校	〈 交流活動 〉 1 「どうぶつえんをつくろう」 2 研究協議 (1) 挨拶 岩舟町立岩舟小学校長 川島 宗竹 (2) 本日の授業について 岩舟町立岩舟小学校教諭 西村 美代子 岩舟幼稚園教諭 島田 麻理恵 (3) グループ協議「幼児と児童が協同的に学ぶために大切にしたいこと」 (4) 発表 (5) 指導助言 宇都宮大学教育学部教授 青柳 宏
第5回	2／17（月） 岩舟町 中央公民館	〈 振り返り 〉 1 挨拶 岩舟町教育委員会教育長 和久井 紀明 2 事業実践報告 岩舟幼稚園教諭 島田 麻理恵 岩舟町立岩舟小学校教諭 西村 美代子 岩舟町教育委員会指導主事 松本 和彦 3 研究協議「接続の時期に大切にしたい子どもの学びについて」 「連携のために今後どのような取組を行っていくか」 4 指導助言 宇都宮大学教育学部教授 青柳 宏

2 小学校の授業公開

幼稚園や保育所で生活していた子どもが、小学校に入学すると様々な変化に出会う。遊びを中心とした幼児期の学びから、教科や時間に区切られた小学校の学びへと学び方が変化する。また、幼稚園や保育所では最年長で有能感に満ちていた5歳児が、学校では最年少の1年生になるなど立場も変化する。

これらの変化は、取り除くのではなく、子どもが幼児期に身に付けた力を発揮して乗り越え、成長する機会になるようにすることが大切である。

そこで、岩舟小学校では、学校課題である「居がいのある学級づくり」に基づき、学ぶ喜び、学び合う喜びが味わえる授業の展開を構想した。具体的には、第1学年の算数科「くらべかた」において、「操作活動の時間を十分にとり、すべての児童が安心して意欲的に学習に取り組めるようにする。」「友達と協力して活動する場面や話し合う場面を取り入れ、自分の考えを発表したり、友達の考えを聞いたりすることを通して有能感や自己肯定感をもたせる。」ことに配慮して授業を展開した。

(1) 当日の指導案

9 本時の指導

(1) 題材名 「くらべかた」

(2) 本時の目標

○二つの広さの異なる四角形について、どちらが広いかわかる方法を考えることができる。

(3) 学校課題、幼・保・小・ジョイントプロジェクトとの関連

本時では、自分のハンカチと友達のハンカチの広さを比較する活動を取り入れることで、友達と活動することのよさを味わわせる。また、二つの異なる四角形の広さの比べ方を考える際には、手順を明確にし、時間を十分に確保することで、どの児童も自分の考えをもって活動に取り組めるようにする。活動を取り入れることは、学ぶ意欲も高めることになる。どの児童も学習に取り組むことができる環境をつくることで、自信をもって活動することができ一人一人が居がいを感じることができるようにしたい。

(4) 本時の視点見

A児・・・学習への取り組みは非常に真面目である。授業中は控え目で、手を挙げても迷ったり自信がもてなかったりすると手を下ろしてしまう。発言は少ない。活動に取り組むまでに時間がかり、周りの友達が作業しているのを見たり、教師からの声かけがあったりしないと始められないことが多い。

B児・・・何事に対しても積極的で授業中もよく発言をする。自分の考えもしっかりとつづことができ、作業も丁寧で早い。みんなの前で発表する際にも、自信をもって自分の考えを述べることができる。

C児・・・授業中はよく発表するが、問題の答えが分かったり、思ったりしたことをすぐに口に出してしまう。楽しいことや自分がやりたいと思ったことがあると意欲的に活動に取り組むが、飽きてしまうと進んでしまう傾向がある。計算問題など考えて解くような問題になると集中が続かない。

(5) 展開 別紙

(5) 展開

☆学校課題との関連 ◎言語活動の充実 ◇人権教育上の配慮

学習活動	時間	指導・支援上の配慮事項	具体的評価規準(評価方法)	資料
1 前時までの内容を振り返る。	3	・比べ方に使う言葉の意味の復習を行う。		
どちらがひろいかくらべかたをかんがえよう。		・広さの意味について理解し、本時のめあてを提示する。		
2 二つのハンカチの大きさを比べる方法を考える。	7	・見ただけでどちらが広いかわかるが、それを確かめるための比べ方を考えさせる。 ◎直接合わせればよいことに気づかせ、自分と友達のハンカチの広さを協力して比較し、直接比較の方法を体験させる。	・身のまわりにあるものの広さに関心をもち、比べようとしている。(観察)	ハンカチ 2枚
3 二つの四角形の広さの比べ方を考える。	13	・どちらの四角形が広い、もしくは同じになるか予想を立てさせる。 ・道具箱の中に入っている物を使って調べる方法を考える。 ☆活動時間を十分に確保し、一人一人が自分の考え方を持てるようにする。 ・作業が進まない児童に対してはこれまでの長さ、かさの学習で学んだ方法が使えないか想起させる。	・二つの異なる四角形の広さについて、直接比べたり、ある大きさの単位として、そのいくつ分かで数値化したりするなど、自分なりの比べ方を考えている。(観察・作業用紙)	四角形の紙 2枚
4 自分の考えた比べ方を発表する。	10	☆◎自分の言葉を使って考えた比べ方を発表する。上手く伝えられない児童については、教師による助言をすることによって発表できるよう支援する。		
5 ます目シートを重ね、どちらが広いかわかて考えさせ発表する。	7	☆ます目を使ってどう比べるか、友達と方法を考える。 ・ます目を数えれば比べられることに気づかせる。 ・ますの数が「多い、少ない」ではなく「○はます目のいくつ分、○はます目のいくつだから、～のほうが広い、狭い」と表現させることで広さの意味を意識させる。また、広さのことを「面積」ということにもふれる。		ます目シート 四角形の紙 2枚
6 本時のまとめをする。	5	・広さを比べるには、直接比較と任意単位による方法があることを押さえ、本時のまとめをする。		

(2) 授業の様子～参会者の記録から～

課題解決に向かって、はさみなどの身近なものを手がかりにいろいろな方法で試そうとしていた。

友達の意見と自分の考えを比べたり、友達の発表をヒントにして活動したりしている子がたくさんいた。

「何枚もあるから、いくらでも試していよいよ。」という先生の一言で、児童が安心して活動に取り組んでいた。

多様な意見を受け入れ、認め合う雰囲気が学級の中にできていたにので、一人一人が自信をもって発言していた。

(3) 協議

幼稚園、保育所、小学校の教職員が4～5人のグループになり、「1年生が協同的に学ぶために大切にしたいこと」をテーマに協議をした。

1年生が協同的に学ぶために大切にしたいこと

- ・一人一人が自分の考えをもてるように試行錯誤できる時間を確保する。
- ・児童が意欲をもって取り組める課題を設定する。
- ・教師が多様な考え方を認める。
- ・話しやすい雰囲気をつくる。
- ・自分の考えを話したり友達の考えをきいたりしながら考えを深めていけるようにする。

(4) 指導助言（宇都宮大学教育学部教授 青柳 宏 先生）

○子どもの学びについて

子どもはいかなる時も仮説をもつ。仮説をもったら、自分で試行錯誤して、それを立証していく。さらに、その考えを言語化して伝えたり確認し合ったりする時に、「協同」が生まれ、そこに「学び合い」が成立する。この過程を大切にしなければならない。

○授業の展開について

子どもの学びを大切にするために、自分の仮説を立証する試行錯誤の時間をたっぷり確保してあげなければならない。教師と児童の間で正解を確認し合う授業ではなく、十分に考える授業を展開すれば、そこに協同的な学びは生まれてくる。



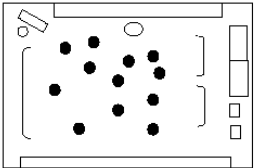
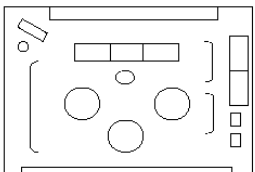
「私のハンカチと先生のハンカチの大きさを比べてみよう」

3 幼稚園の保育公開

幼児期に、「自分の考えを言葉で伝える。」「友達と遊びをつくり上げていく面白さを感じる。」ことは、小学校以降の学習への意欲や考える力につながっていく。特に、5歳児の保育では、友達と自由に考えを出し合ったり折り合いをつけたりしながら、共に遊びをつくり上げていく面白さが味わえるように環境を整えることが望ましい。

そこで、岩舟幼稚園では、幼児が自分の思いをもって友達とかかわりながら思いを実現させていく喜びが味わえるように、様々な素材を準備し、幼児が自由に使えるように環境を整えた。また、幼児同士の話し合いやかかわりが生まれるように、グループで話し合う時間を入れるなど展開を工夫した。さらに、教師は、幼児の活動に必要な以上に介入せず幼児同士のかかわりを見守った保育を心がけた。

(1) 当日の指導案

指導計画(日案) 平成25年 11月 29日(金) さくらんぼ1・さくら1組 21名(男9・女12) 担任 島田 麻理恵				
ねらい	●共通の目的に向かって、グループの友達と協力しながら意欲を持って楽しく取り組む。 ●身近な廃材や材料を使って、工夫しながら製作する面白さを体験する。 ●気持ちを言葉で伝え合う喜びを味わう。 ●絵本と歌の世界を楽しむと共に、想像しながらイメージを膨らませていく。	保育の視点	●楽しく遊びながら数の面白さを感じ、友達と一緒に考えながら人数を集められるようにする。 ●友達の意見を聞いたり、話し合いや発表を通して新しい考えに気づき、自分の言葉で相手に伝える喜びを味わえるようにする。 ●様々な材料や道具の特徴を活かし、分量や個数、長さも取り入れながら製作する。 ●友達と協力して1つの作品を作る楽しさや、満足感を感じられるようにする。	
時 間	幼児の活動	○ 環境構成	○ 指導上の留意点	○ 視点児
10:20	・机、椅子を片付ける。 ・体操服に着る。		・机、椅子を片付ける際は、手を挟まないように注意し、椅子は4つずつきちんと数えて重ねるように声をかける。	
10:35	○一斉保育 ●「3びきのこぶた」の歌を歌う。 ○「文字の数だけ集まれゲーム」をする。 ※保育者の出す絵を見て数えていく。 ・ピアノに合わせて部屋の中を動いていく。  いえ！→2文字→2人組	＜文字の数だけ集まれゲーム＞ 	○「文字の数だけ集まれゲーム」では、ピアノに合わせて歩き回るので、数をつけることは何かを子ども達で考えていけるように話し、それぞれ手をあげて発表してもらう。 ○保育者の出す絵を見てから、言葉と文字数を考えて人数を集めるので、全員が理解できるようにゆくりと分かりやすく説明していく。 ○きちんと数が合っているか、全員で数えて確かめていく。 ○奇数で人数が足りない時や余る時は、子ども達でどうするか、ルールを決めてから行うようにする。 ○グループごとの話し合いでは、一人ひとりがきちんと意見が言えるように見守っていく。自分から言えないような園児にはさりげなく援助を行い、徐々に積極的にいられるように盛り上げていく。 ○発表する時は方法を示し、聞きとりやすい声で言えるように伝えていく。	(園児A) 友達に積極的に声をかけながら、人数を集める楽しむ。 (園児B) 言葉にしたり、指で数えたりしながら楽しむが、人数が合わないとき、友達を無理に省こうとしてしまう。 (園児C) 様子を見ながら友達の呼びかけを待つが、常に同じ友達とグループを作ろうとする。
	○前日に作ったお面をつける。 ○「3びきのこぶた」の手遊びをする。 ○絵本と歌のこぶたの性格と家の特徴を手をあげて発表する。 ○グループごとに「どんなこぶたになりたいか」「どんな家にしたいか」を話し合い、グループごとに発表する。 ・トイレ、水分補給をしたい子に声をかけ済ませる。 ・お道具箱から必要な道具を用意する。 ○「みんなでおうちをつくらう！」(製作) ・どの道具や材料を使うか話し合いをする。 ・廃材などの材料を使って自由に製作していく。	＜みんなでおうちをつくらう！＞ 	○「みんなでおうちをつくらう！」では、「他と同じでなくても良い」という安心感を与え、思い思いの作品を作れるように話していく。 ○様々な材料や道具を用意して自由に使えるように分かりやすく配置していく。 ○友達と協力して製作する子ども達の取り組みを見守り、必要な時に声をかけていく。 ○途中で手を洗いたい場合はきちんと話をしてから行うように声をかけていく。 ○終わらない時は後日行うことを伝え、じっくりと考えて夢中になれるような時間にしていく。 ○一人ひとりの取り組みをたくさん褒めながら、完成に期待が持てるように声をかけていく。 ・片付けの時は、ゴミ袋や雑巾などを用意しておき、必要なものを選んで、友達と綺麗にできるように見守っていく。	(園児A) 自由に作る喜びを感じながら、いろいろなアイディアを出し、リードしながら進めていくとする。 (園児B) 様々な意見に、友達とぶつかり合い、その中で納得しながら活動しようとする。 (園児C) 進んで発言せずに、友達の意見に合わせていくとする。
12:00	○続きは後日行うことを伝えて、片付けをする。 ・自分達で使ったものを協力して片付ける。			

※指導案は、「栃木県総合教育センター 教材研究のひろば」よりダウンロードできます。

（２）保育の様子～参会者の記録から～

指示を待って行動するのではなく、自分で考え、判断して行動していた。幼児が主体的に活動している姿が印象的だった。

一人一人が「こんな家を作りたい。」という思いをもっていた。友達の作っているものを見て思いついたり、材料からイメージがわいたりしていた。

友達の考えを聞いて、自分の意見とすり合わせ、葛藤しながらも、なんとか折り合いをつけようとしていた。

「こんな家がいいと思う。」など、自分の思いを言葉にして友達に伝えていた。また、友達の話を一生懸命、きこうとしていた。

（３）協議

幼稚園、保育所、小学校の教職員が４～５人のグループになり、「５歳児が協同的に学ぶために大切にしたいこと」をテーマに協議をした。

５歳児が協同的に学ぶために大切にしたいこと

- ・一人一人が自分の思いをもって行動できるような活動を仕組む。
- ・自由に発想を膨らませたり考えたりする時間を確保する。
- ・自分の思いや考えを言葉で伝えられるようにする。
- ・幼児同士のやりとりを大切にして、必要以上に、教師が介入しない。

（４）指導助言（宇都宮大学教育学部教授 青柳 宏 先生）

○子どもの学びについて

子どもは自分の世界を作ろうとしながら、それと同時に他者と関わり、葛藤しながら、新たな自分の世界を作り直そうとしていた。これが「協同的な学び」である。自分の世界を形成できるかどうかは自発性の育ちが影響する。遊びの中で、自ら考えたり行動したり判断したりする経験が、自信となり、自分の世界を形成することができるようになる。

○保育の展開について

友達を受け入れたりぶつかり合ったりしながら、子ども同士が考えて活動を成立させていく過程をじっと見守っていた教師の姿が印象的だった。教師が子どもを信じているから、子どもも安心して自分を出していたのだと思う。教師が決して焦ってはいけない。子どもの思考に合わせたスローな教育の大切さ、見守り続ける教師の存在の大切さを再確認した。



「えんとつをつけよう！」

4 交流活動

幼稚園・保育所と小学校の交流活動では、幼稚園や保育所の幼児が小学校に招待される形が多く実施されている。その際、活動計画は、全般的に小学校が作成し、幼児は、どちらかというところ招待される立場で「お客さん」になりがちである。

そこで、岩舟幼稚園と岩舟小学校は、幼児にも児童にも意義ある交流にするための工夫をした。指導案を作成する前に、岩舟幼稚園の副園長、岩舟小学校の教務主任、各々の担任が集まり、交流に向けての日程、持参物等の確認を行った。また、互いに交流活動の案を持ち寄り、すり合わせ、双方のねらいの確認や役割分担等、共通理解を図った。さらに、5歳児の担任は小学校へ、小学1年生の担任は幼稚園へ保育・授業参観に行き、休み時間等に、子どもたちとかわり、親しくなった。

そして、それぞれに交流の案をもち寄り、すり合わせをしながら1枚の指導案（本時）を一緒に作成した。

（1）当日の指導案

○本時の展開			
時間	教師の支援	幼児・児童の活動	保育者の支援
10:15	・児童のめあてを確認し、本時の活動への意欲づけをする。 ・事前に班編成をしておく。	○班ごとに整列し、準備をする。	・並んで安全に移動できるようにする。 ・必要ならトイレに行くように促す。 ・事前に班編成をしておく。 ・緊張している子には安心するような言葉かけをし、1年生ときちんと並べるように見ていく。 ・T1として進める。 ・園児が手本となれるように進めていく。
10:20	・保育者と一緒に歌ったり、踊ったり、楽しく活動させ、緊張感をほぐせるよう支援する。 ・支援者も一緒に手遊びをする。	1 手遊び歌を歌う。	
10:23	・T1として進める。 ・円滑に自己紹介ができるように支援する。	2 「もりのくまさん」を歌う。 ・班ごとに輪になって踊りながら歌う。	
10:28	・T1として進める。 ・あらかじめどんな動物を作るか考えさせておく、一人が一つは出来上がるようにさせる。 ・粘土以外の材料も用意しておく。 ・支援員は支援が必要な児童やグループの個別支援を行う。	3 自己紹介をする。 ・児童→幼児 ・自分の名前・好きな動物	・自己紹介では子どもたちがどのように進めていくのかを見守り、不安がる子にはさりげなく援助を行い、徐々に積極的になれるようにしていく。
10:53	・他クラスのよいところを見つけれられるようにさせる。	4 粘土で動物を作り、班ごとに動物園を作る。 ・出来上がった動物を班ごとの決められた場所に工夫して並べる。	・あらかじめどんな動物を作るか考えさせておく、粘土以外の材料も用意させる。 ・1年生との関わりを楽しめるように、一人一人の気持ちや発想を受け止めていく。 ・飾るときには場所などを話し合うなど、協力して作れるように声をかけていく。 ・どんなところがよいか、違いなどに気付けるようにしていく。
10:58	・本時の活動の感想を児童に質問する。	5 他の班の動物園を班ごとに見学する。	
11:00		6 活動の振り返りをする。	・積極的に発表できるように励ましていき、できた喜びを味わえるように発言を認めながら褒めていく。
		○ 記念撮影（班ごとに作った動物園と一緒に） ○ 後片付けをする。	
視点児	児童		幼児
	4 明るく元気で誰にでも優しくすることができる。グループ活動でもみんなの意見をまとめて話し合いの中心的存在になっている。	2 4 発想力が豊かで物作りに意欲的に取り組むことができる。自分の思いが強くなる傾向があり、夢中になってしまうと、ねらいからそれてしまうことがある。	A 気持ちが盛り上がると抑えられなくなり、けじめがつけられなくなる。とても明るくひょうきんな性格だが、人前での発表は苦手である。 B 表現力が豊かで手先が器用なので製作では最後まで丁寧に集中して取り組むことができる。不安を感じたり自信がなかったりすると、取りかかりが遅れてしまうことがある。

※指導案は、「栃木県総合教育センター 教材研究のひろば」よりダウンロードできます。

(2) 交流活動の様子～参会者の記録より～

幼児も児童も自分が作りたい物を作っていたが、幼児はさりげなく児童の言動を見ていて、取り入れていた。

幼児が落ち着いていた。自分のやりたいことがあるから、安定した気持ちで交流ができたのではないだろうか。

児童が幼児を常に気にしている様子が見られた。幼児が、苦労して粘土に飾りを付けている様子を、途中までは手を出さずに見守り、適切なタイミングで手伝っていた。

活動の途中に、幼稚園教諭が小学生に、小学校教諭が幼児に自然に声をかけていた。事前に互いの子どもを知っておくことは大切だと思った。

(3) 協議

交流後に、活動内容や子どもの様子を話し合うことはとても重要である。ここでは、交流活動を通した幼児と児童の学びがより明確になるように幼稚園、保育所、小学校の教職員が4～5人のグループになり、協議をした。

幼児と児童が協同的に学ぶために大切にしたいこと

★教師が互いのねらいを理解していること

交流活動の時、どうしても自分の校種の子どもばかりを指導してしまうことが多かったが、互いのねらいを把握していると、同じ場面で同じ視点に立って指導できることが分かった。幼児も児童も迷わず、安心して活動に取り組むことができる。

★幼児・児童一人一人が主体的に活動できる内容を一緒に考えること

それぞれの子どもが興味をもっているものを情報交換し、適切な教材、活動を選ぶことで、幼児も児童も一人一人が自分の思いをもって、活動に取り組むことができることが分かった。主体的に取り組んでいるからこそ、相手の思いを理解することができたり必要な情報を取り入れようとしたりして、協同的な学びが生まれる。

★幼児期から児童期にかけての子どもの発達を理解すること

発達を理解していると、子どもにかかわる時、双方の教師ともに、必要以上に介入することなく、適切なかわり方ができる。それによって、子どもが主体的に行動することができて、充実した活動になる。

(4) 指導・助言 (宇都宮大学教育学部教授 青柳 宏 先生)

○子どもの学びについて

- ・ 今回の交流活動で、幼児の感性の広がりを感じた。児童の様子を見たり、一緒に活動したりすることで、幼児のイメージや行動に変容が見られた。今回の交流は、幼児にとって異質な文化と出会い、自分の世界を変えていくことができる貴重な経験だったと思う。
- ・ 児童は、幼児に自分の存在をアピールしていた。幼児がいることで、自己有用感を感じる機会になっていた。

○教師の学びについて

- ・ 幼稚園教諭は小学校の授業のイメージを、小学校教諭は幼稚園の保育のイメージを理解し、認め合っていた。それぞれの教育のよさが生きていた。
- ・ 互いの発達が見えていて、幼児、児童へのかかわり方が適切だった。事前の話合いやねらいの共有化が有効なのだった。

5 振返り

(1) 連絡体制の整備

今回のジョイントプロジェクトの連絡等は岩舟町教育委員会が窓口となり、岩舟町すべての幼稚園、保育所、小学校、中学校に情報が周知された。また、定期的に顔を合わせた研修会が行われたので、教職員同士が顔見知りになり、研修会以外でも活発な情報交換が行われた。今後も、継続的な連携が求められる。

さらに、岩舟町教育委員会が町全体で実施した「幼・保・小連携レベルチェック」（右表参照）で、園だより、学校だよりの交換や連絡網の整備など、岩舟町の連絡体制の課題が明らかになった。



幼・保・小連携レベルチェック！

1	幼稚園や保育所、小学校と子ども同士の交流活動をしている。	88%
2	幼稚園や保育所、小学校と教職員同士の交流がある。	63%
3	幼稚園や保育所、小学校で職場体験（保育や授業への参加など）をしたことがある。	88%
4	幼稚園や保育所、小学校の合同の研修会に参加している。	75%
5	幼稚園や保育所、小学校と入学前の情報交換をしている。	100%
6	幼稚園や保育所、小学校と入学後も情報交換をしている。	88%
7	指導要録や保育要録を小学校に送付している。 幼稚園や保育所から送付された要録を渡したり、活用したりしている。	100%
8	幼稚園や保育所、小学校と園だよりや学校だよりなどの情報を交換している。	0%
9	幼稚園や保育所の保育や、小学校の授業を参観している。	75%
10	保育や授業の参観後、協議をしている。	63%
11	幼稚園や保育所、小学校との連絡体制（連絡網など）が整っている。	0%
12	教育課程や保育課程に、接続期（小学校への入学）を意識した取組が位置付いている。 入学当初、1年生独自のスタートカリキュラムなどがある。	75%
13	地域（市や町など）に、幼・保・小の連携組織（連絡協議会など）がある。	88%
14	幼・保・小の連携をして、よかったこと（成果）がある。	100%
15	幼・保・小の連携は、とても大切だと思う。	100%

岩舟町の

幼・保・小連携レベルは

11

ですよ！

(2) 一貫性のある指導計画の作成

岩舟町では、接続に大切にしたい子どもの学びの姿を7つのキーワードでまとめた。

また、学びを実現させるための教師の在り方のポイントをまとめた。

接続の時期に大切にしたい子どもの学び	学びを実現させるための教師の在り方
・ 自らかかわる。 ・ いろいろ試す。 ・ イメージをもつ。 ・ 真似をする。 ・ 折り合いをつける。 ・ 言葉で伝え合う。 ・ 認め合う。	・ 伸び伸びと取り組める環境づくり ・ 興味をもてるような課題や教材の工夫 ・ じっくり考えられる時間の確保 ・ 安心して発言できる雰囲気づくり ・ 子ども同士のやりとりの見守り

これらを視点に、各園、各学校でカリキュラムの見直しに取りかかったところである。今後は、見直したカリキュラムを持ち寄って、それぞれのカリキュラムを一緒に作成するなど、さらに充実したものになるよう取り組んでいきたい。

成果と課題

- ・ 保育研究会や授業研究会では、子どもたちが主体となって協同的に活動できる内容を中心に取り組んだ。交流学习では、幼児が小学校の雰囲気慣れ、児童が自分の成長を感じる良い機会となった。両方の子どもたちにとって、互いに学びのある交流活動になった。

【学びのある交流活動】

- ・ 幼稚園や保育所と小学校の教職員の交流により、相互理解が深まった。保育研究会や授業研究会で互いの保育や授業を参観して協議したり、幼稚園と小学校の授業者と一緒に活動計画を立てたり、子どもの実際の姿を通して援助や指導を振り返ることができた。

【授業交流による相互理解と指導・支援の見直し】

- ・ カリキュラムの接続を意識しながら、各園、各学校でアプローチカリキュラムやスタートカリキュラムの見直しに着手し始めたところである。今後は、幼児、児童の生活と学び等の段差をなめらかにし、就学前後の不安を解消できるよう、教育内容の接続を図るためのカリキュラムの編成や実施に取り組んでいく。

【カリキュラムの見直し】

- ・ 幼・保・小連携レベルチェックにより、全ての幼稚園、保育所、小学校において、小学校入学前の情報交換が行われていることが確認できた。また指導要録や保育要録が小学校に送付され、入学後の指導に活用されていることも確認できた。

【幼保小連携レベルチェックの活用】

- ・ 幼稚園や保育所の園だよりや小学校の学校だより等を相互に送付したり、連絡網を整備したり、幼・保・小の連絡を更に密にして連携を深めていく。

【情報の共有】

- ・ 多くの幼稚園や保育所、小学校において、子ども同士の交流活動が実施されているので、今後も交流活動を継続し、内容の充実を図っていく。

【子どもの交流活動の継続と充実】

- ・ 保育研究会や授業研究会、公開日等を互いに連絡し、保育や授業を参観する機会を増やし、意見交換や研究の場を設けながら、教職員同士の交流を推進する。

【教職員の交流の継続と充実】



交流活動や合同研修などの
「幼・保・小連携事業」の参考にし
てください。

一緒に栃木の幼・保・小連携を
推進しましょう！

